

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

梶 茂樹



学位申請者 結城佐織

論 文 名 満洲語文語における形態と音韻について
— 『満文金瓶梅』を中心に —

満洲語は、現在の中国東北部を中心に居住していた満族の言語であり、また 17 世紀初頭から 20 世紀まで中国とその周辺を支配した清朝の公用語であった。そのため、現在も、当時の膨大な数の文献が残されている。ただ満族は、その後、中国支配において漢族に同化したため、現在は満洲語を話す人はほとんどなく、その末裔であると言われるシベ族などによって、東北部や新疆地方においてわずかに話されているにすぎない。

結城佐織氏のこの博士号請求論文は、満洲語文語の形態と音韻に関する文献・言語学的研究であるが、扱う資料を 17 世紀のもの、とりわけ『満文金瓶梅』に限っている。

『満文金瓶梅』とは、中国の小説『金瓶梅』を満洲語に訳したものである。これは全 100 回 5 万行あまりからなる大部のものであるが、満洲語研究におけるその価値は大きく、つとに大東文化大学の早田輝洋教授がデジタル化しており、用例検索などが容易になっているものである。結城氏は大学院修士課程までは大東文化大学に所属しており、早田教授の元で『満文金瓶梅』などを資料に、満洲語の研究を行っていたものである。

満洲語文語の研究は、すでに何人もの研究者が行っている。しかしながら、その研究は網羅的であろうとするあまり、時代の異なる複数の文献を扱っているため、そこに現れる変異が時代的な変化なのか、あるいは文献の差による同時代的な変異なのかが分かりづらくなっている。そのため、本論文で結城氏は、扱う中心的資料を『満文金瓶梅』に限定し、分析対象を 17 世紀の音韻と形態に設定した。この目標設定により、分析精度が飛躍的に高まっている。満洲文語の研究において、1 つの文献をこれだけ精緻に分析したものは他に例を見ない。

本論文は、分析の資料部分を含むとはいえ、vii+370 ページから成る大部のものである。その構成は以下のようなものである。

まえがき

第 1 章 序

第 2 章 語の形態

第 3 章 音素と音節

第 4 章 母音調和

引用・参考文献

あとがき

第 1 章では、まず現在の満洲語を取り巻く状況と、『満文金瓶梅』(1708 年序)の成立事情が述べられる。続いて、満洲語文語の音韻研究における文献、ならびに漢語や朝鮮語、日本語など周辺言語で記された文献について述べる。ここで、ローマ字転写に関しては、ドイツのメレンドルフによる *A Manchu Grammar* (Möllendorf 1892) で用い

られたものを基本的に踏襲することが示される。

第2章は、音韻分析のベースとなる語の形態について述べる。その中でも特に動詞構造を中心に議論は進む。満洲語は、動詞語幹に接辞が後続していくいわゆる膠着語であり、動詞に活用がある。また通時的観点からは動詞形成辞と認められる接辞が複数あるが、漢語を満洲語に取り入れる際の-l 以外は非生産的であり、すでに語幹の一部とみなすべきであると主張し、例えば gisur- {話す} など、n 以外の子音で終わる動詞語幹を認める。また伝統的に名詞形成接辞、形容詞形成接辞とされてきた-n (例 eye- {流れる}/eyen {流れ}) についても、もはや共時的にはその機能を果たしていないことを指摘する。

第3章は音素と音節について述べる。母音文字は a, e, i, o, u, ũ (=u) の6文字で、子音文字は通常の n, k, q, g, ǧ, x, h, b, p, s, š, t, d, l, m, c, j, y, r, f, w に加えて、漢語などの借用語表記のための特殊文字 k', g', h', ts', ts, dz, ž, sy, c' y, jy, ng (=ŋ) がある。

満洲語の文字体系には穴があり、その音素体系について研究者の意見の一致をみていない。例えば、母音は文字上 i, e, a, o, u, ũ の6つを区別するが、ũ は通常 š, t, c, y, q, ǧ, h の後にしか現れず、しかも ũ の前に š, t, c が現れるのは漢語からの借用語のみである (ただし満洲語でも ta は生じるが du と書かれる)。また k, g, x に関しても、その後には母音 i, u, e が来て、q, ǧ, h の後には a, o, ũ が来るという分布上の制限がある。ことため、母音音素としては /i, e, a, o, u/ の5つであり、/k, g, x/ と /q, ǧ, h/ が対立するとする説や、k, g, x と q, ǧ, h は対立せず、母音が /i, e, a, o, u, ũ/ の6つであるとする説、さらには文字上の表記通り、母音も /i, e, a, o, u, ũ/ の6つで、子音も /k, g, x/ と /q, ǧ, h/ が対立するとする説などがある。結城氏は『満文金瓶梅』の時代には k, g, x と q, ǧ, h の対立はなく異音の関係にあったが、その体系上の隙間に、[ka] (k'a と表記) などの音声連続を含む漢語からの借用語が浸透し、体系が乱されたとの結論に至る。

また母音連続に関しても、2つの母音が並ぶのは oo のみであり、これは発音上二重母音/oo/ や長母音/o:/ ではないとみる。母音連続で文字上2番目の位置に o が来るのは、io, eo, oo, ao の場合である。io, eo に関しては、母音調和、漢語音との対応、また音節構造から、それぞれ、/iu/, /eu/ であったこと、さらに、heolen ⇔ huwelen {愈る} のような音位転換の例から、文字上の huwe は一音節であるという結論を得る。oo に関しては、諺文転写や漢語音訳表記、三家子満洲語、また母音調和で -ha/-he/-ho と変わる完了・過去の接辞が例えば dobo- {供える} においては 調和的に dobo-ho {供えた} となるのに対して、too- {罵る} では oo とあるにも拘わらず too-ho とならずに非調和的に too-ha {罵った} となることや、さらには母音の共起関係などから、/ou/ ~ /ow/ であろうと推測する。ao についても同様に /au/ ~ /aw/ とみる。

満洲語の音節構造については、CV 形が基本であるという分析結果を提示する。結城氏は綿密なデータチェックにより、満洲語の母音はその音節構造によって、母音が削除されやすい位置があることを見いだす。最も削除されやすいのは、(C)V.CV.CV(C) という語の環境で、第2音節の初頭子音が共鳴音である際の、それに続く母音である。その結果、nomohon ~ nomhon {良く慣れたもの} というような表記の揺れが生じる。これは、結城氏は、nomohon から母音削除によって nomhon が生じたとみる。そしてこれは、ツングース諸語との比較からも妥当性を持つことが証明される。例えば満洲語の umhan {卵} は、ネギダル語では umukta である。またその結果、n 以外の子音は音節末に立たないことを明確にする。

第4章は母音調和についてである。満洲語に母音調和があることはよく知られている。しかし、その母音調和は崩れていると言われる以外は、研究者間の見解の一致はほとんどなく、中心となる基底母音数と素性の設定、母音調和の体系、母音調和の範囲に関し

て、議論は錯綜している。

一般に、母音に関しては、a, o, u を陽母音（男性母音）、e を陰母音（女性母音）、そして i, u を中性母音とするグループ分けがされてきた。語幹内において a, o, u と e は共起しないのに対して、i, u はいずれのグループの母音とも共起する。すなわち、語幹が陽母音である時、接辞は a, o, u, i, u、そして語幹が陰母音の時、接辞は e i, u である。ただし語幹の母音が中性母音の場合 fufu-ha {鋸で引いた} のように接辞の母音が a になる場合と、guku-he {滅亡した} のように接辞の母音が e になる場合とがあり、母音を予測することできない。しかし 1 つの語が接辞母音 a を取ったり、e を取ったりすることはないので、語彙的に分かれていることがわかる。これは、すなわち、もし中性母音と言われてきた i, u が元々は中性母音ではなく、それぞれに陽母音と陰母音の 2 種類があるとすれば、母音調和は完全に働くということである。これはデータを徹底して検証してきた結城氏の着想であり、結城氏は、i にはかつて /i/ と /ɪ/ が、そして u には /u/ と /ʊ (=u)/ があつたと想定する。中性母音とはこの 2 つの区別が消滅した結果生じたものである（ただし /u/ と /ʊ/ はまだ違いを一部残している）。そしてこれらの母音全体を /i, e, u/ グループと /ɪ, a, o, u (=u)/ グループの 2 つに分ける。母音調和における対応は、/i/ 対 /ɪ/、/e/ 対 /a/、/u/ 対 /ʊ/、そして /o/ である。/o/ は /ɪ, a, u/ のグループだが、対応する母音はない。結城氏は、このようにグループ分けされた母音を、素性「狭窄性」（±narrow）で説明する。これは、アフリカなどの言語に見られる「前方舌根性」（±ATR: Advanced Tongue Root）にヒントを得たものである。

結城氏はさらに、17 世紀の満洲語文語において、母音調和が母音同化へと変化してきていることを指摘する。母音調和とは語幹あるいは接辞を含んだ語全体にかかるものであるが、接辞の中には非過去・完了接辞の -ra/-re/-ro のように接辞直前の母音のみが調和に関与する場合がある。また母音 o を含む接辞はこの非過去・完了接辞を含めてすべてその直前の母音が o の場合のみ現れるのである。

まとめれば、満洲語の母音調和が崩れていると言われる理由を、結城氏は、次の 3 点から説明する。すなわち、第 1 に母音体系が 7 母音から 6 母音になった点、第 2 に母音の素性「狭窄性」が母音調和に関与しなくなりつつある点、第 3 に母音調和が語全体の現象から直接接する前方母音のみに関与する同化現象に移行している点である。

本研究は、『満文金瓶梅』という 17 世紀の満洲語文語に関するものであるが、そこに展開される議論は、はるかに満洲語の枠を越え、満洲語の属するツングース諸語全体、さらにはアルタイ諸言語における通時的変遷をも射程に入れたものとなっている。1 つの共時的な研究からこれだけのものを引き出す結城氏の力量に審査委員からも賛辞が寄せられた。

文献研究はその性格上、文字上の区別と音韻上の区別、さらには音声上の区別という 3 段階のレベルの区別が必要となる。これらは多くの場合一致するとはいえ、分析のレベルが異なり、混同することは許されない。そして一見矛盾するかのように見える様々な用例を通して、そこに貫く原理を発見することは研究者の大きな喜びである。しかし、言語研究一般、とりわけ過去の言語の文献学的研究においては、必ずしもすべてを規則で説明することはできず、個別的な事情を加味せざるをえない場合も多々ある。『満文金瓶梅』の場合、それはとりわけ漢語やモンゴル語からの借用語であったり、翻訳上の問題であったりする（『満文金瓶梅』は数人の漢語のできる満人が行ったとされており、個人的な癖や、また単純な書き間違いもあるかもしれない）。それらを 1 つ 1 つ検証していくことは気の遠くなる作業であり、そこには強い意志と学問的に裏打ちされた確かな方法論とがなくては出来ないものである。そして結城氏は、それを見事にこなしてきた。

本論文は、『満文金瓶梅』に見られる 17 世紀満洲語の総合的研究であり、とりわけ母音調和に関する革新的分析は、満洲語研究における大きな貢献と認め、査委員全員が博

士（学術）の学位を与えるにふさわしいものであると一致した。

なお、審査委員からの意見としては、無圈点文字と有圈点文字がまとめてリストアップされていないため、両者がどう違うかが分かりづらい、第2章の文法記述が体系的でない、満洲語の日本語訳に不確かなものがある、ロシア語の文献を見ていない、早田氏のデータベースにおける誤りをそのまま引き継いでいる、などの意見があった。これらは結城自身氏も自覚している部分であり、これからの研究に活かしていく決意が表明された。